

# 慢性期病棟で長期入院する精神疾患患者への生活時間の質に関する研究：看護師による病棟レクリエーションを通して提供されるケアに焦点を当てて

著者	上村 尚美, 奥山 勤武, 川里 庸子, 栗生田 友子
雑誌名	看護研究交流センター活動報告書
巻	24
ページ	129-132
発行年	2013-04-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10631/1111">http://hdl.handle.net/10631/1111</a>

慢性期病棟で長期入院する精神疾患患者への生活時間の質に関する研究  
—看護師による病棟レクリエーションを通して提供されるケアに焦点を当てて—

上村尚美<sup>1)</sup>，奥山勤武<sup>1)</sup>，川里庸子<sup>2)</sup>，栗生田友子<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>独立行政法人国立病院機構さいがた病院，

<sup>2)</sup>新潟県立看護大学，

<sup>3)</sup>国立障害者リハビリテーションセンター

キーワード 精神科慢性期病棟、長期入院、精神疾患患者、生活時間の質、病棟レク

## I. 研究目的と研究の背景

精神科慢性期病棟は、主に精神疾患の慢性期に入った患者が入院しており、入院期間が長期化しているのが特徴である。平成23年度厚生労働省の患者調査によると、おおよそ精神科疾患患者の平均在院日数は約1年であるが、この数には急性期病棟の非常に短期間の入院患者が含まれる一方で、慢性期病棟に入院するいわゆる社会的入院の患者数も含まれ、慢性期病棟では数十年にわたる入院を経て、社会に復帰することなく病棟で死を迎える患者もある。

入院生活が長期になると、自由な生活空間が制限され、入院中の規則に合わせた生活が余儀なくされる。ことに閉鎖病棟であれば、その生活規制は著しく高い。こうした患者に対し、入院時間が治療的に有効で、かつ主観的に豊かな時間にしていくことは重要になる。

慢性期病棟では、入院中の時間を活用し、治療目的が明確にある作業療法が行われている。また、作業療法の流れをくみつつ、病棟の場を中心に行われる精神科レクリエーションが「病棟レク」という呼称を用いながら行われることがある。この病棟レクは、現場では治療の一環として明確に保険点数に換算されているものもあるが、必ずしも作業療法士のみが行わないために、ケアの一環とみなされ保険点数に換算されずに実施されている実情もある。

精神科作業療法とは、おもに思春期から老年期にわたり、統合失調症、気分障害、認知症、知的障害、アルコール依存症、人格障害などを対象に、「現実場面での接触を通し現実検討の向上、計画・予測・理解力・問題解決・決断力・集中力・持続性などの精神機能の改善、自己の可能性や意欲を高める、自尊心・自己満足・自信をつける、作業活動の過程と結果による自己評価の機会、集団内での人間関係を通しての対人関係の改善、異常体験や奇異な行動などからの阻隔、感覚の統合、日常生活技能の習得、就労への橋渡し、社会への関心」を目的としている<sup>1)</sup>。その中で、レクリエーションは、精神科作業療法の中のひとつとして位置づけされており、レクリエーションには楽しみや個人的な満足感を提供し、日常生活でのストレスを引き起こす要因となるものから逃れるというような本来的な価値があり、情緒障害や精神障害に悩む人々にとっては、更なる意義と症状を予防する効果がある。<sup>2)</sup> 余暇にレクリエーションを行うことにより、健康と幸福が促進され、次に、レクリエーションを通して、生活技能の進歩と強化を図り、さらに、孤独感や疎外感を克服し、新しい知人・友人を作るというように、レクリエーションに参加することは、精神障害の兆候や症状の緩和が図れ、陽性症状を抑えることが期待でき、その症状抑制の効果が80%に及ぶという報告<sup>3)</sup>もある。

精神科作業療法に関わるスタッフは医師、看護師、作業療法士、臨床心理技術員、精神保健福祉士など様々である。レクリエーションは患者間及び患者—看護師間の気持ちの交流をはじめ、心が触れ合うことによる新しい人との人間関係や多く人との人間関係を築き、さらにその人間関係を深める<sup>4)</sup>。作業療法は作業療法士が主となって行っているが、看護師は患者と長い時間接しており患者の特徴や情報を知っているという点、看護師が関わることで患者も安心してレクリエーションに参加できるという点などから、レクリエーションへの看護師の参加は重要である。

そこで、入院中の自由な生活時間を看護師がどのように認識し、支援をしているのか、その時間にいわゆる病棟でのレクリエーションはどのように行われ、看護師がどのような役割を発

揮しているのかを明らかにすることを目的として本研究を行った。

本研究成果により、精神科慢性期病棟に入院する患者の入院生活の質を高めるために看護師が何をすべきであるのか、また精神科レクを企画する場合、どのように企画することで生活時間の質の向上につながるのかについて検討する資料となると考えられる。

なお、本研究では用語を以下のように定義した。

精神科慢性期病棟とは、精神疾患を有する患者で、急性期治療が終わり、病状が安定している患者が入院する病棟とし、長期入院とは、平均入院在日数が 100 日を超える入院とした。また、レクリエーションとは、精神科で行う創作、運動、音楽、ゲーム、調理といった作業活動とした。

## II. 研究方法

研究デザインは量的および質的記述的研究デザインをとった。

対象は、関東甲信越にある慢性精神疾患患者が入院する医療施設に働く看護師とした。

データ収集は、質問紙法および面接法を用い、入院中の自由な生活時間や支援に関する看護師の認識、病棟でのレクリエーションの実態と看護師の役割等について多肢選択および自由記載での回答を求め、同意が得られた対象施設と看護師に対しては、具体的な病棟レクでのかわりや企画について面接によって質的データを聴取した。

データ分析は、質問紙の数量化データに関しては、記述統計によって分析し、質問紙の自由記載内容および面接による質的データは、内容分析法を参考に、データを整理し、記述した。

研究期間は平成 24 年 7 月～平成 25 年 3 月であった。

## III. 倫理的な配慮

本研究は研究者の所属する病院の倫理委員会の承認を得て行った。

質問紙法では、質問紙の郵送前に書面にて説明し、面接を了承して頂ける場合は葉書を添付し、協力の意向を確認した。面接の了承を得られた対象には、面接の中断が可能であること、不利益がないこと、研究結果の匿名性の保証、データの厳重な管理について説明し同意を得た。

## IV. 結果

質問紙は 156 施設に 453 部配布し、回収された質問紙は 100 件で、回収率は 23.0%であった。面接では 3 施設 10 名の対象に会い、実際の病棟レクについて語ってもらった。

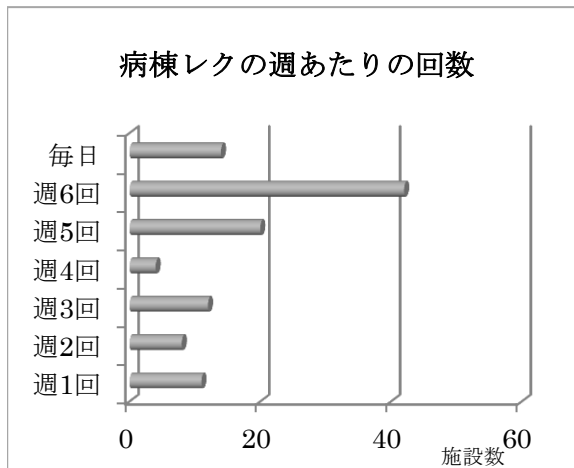
質問紙法に回答をもらった施設の概要は、国立系 6、公立 3、私立および法人 57、その他で、いずれも精神科病棟を 1～3 フロアの範囲で有していた。患者の平均的な在院日数は 30 日～5290 日の範囲にあり、患者の平均年齢は 46.3 歳～86 歳であった。

### 1) 病棟レクの実態について

#### (1) レクの開催

病棟あたりの 1 週間の回数を尋ねた質問では、図 1 のように、毎日行くと答えた施設が 14、週 1 回と答えた施設が 11 とばらつきがあった。この数のばらつきは病棟レクというケア行為をどのような具体的なケアの範囲で捉えているかの違いを反映していると考えられた。

病棟レクを開催する曜日を尋ねた質問では週 6 回は日曜日を除く日を、週 5 回は土日を除く毎日を、週 4 回以内は曜日の具体的な記載があり、レクの企画を明確に位置づけている施設があることがわかった。



(2) 自由時間を活用した病棟レクリエーションおよびイベントについて

病院全体のイベントがどのように実施されているかについての質的記述は表 1 のように整理された。企画は主に季節に関係して企画されるものと、随時企画されるもの、地域との連携の中で企画されるものがあった。表のように、季節による企画は季節ごとに病院によって企画されるものが異なっていたが、随時企画されているものには、院内外の企画、学生やボランティアによる企画、職員と合同の企画、地域との交流の中で企画されるもの等があった。

企画の実施の目的は、患者に対するケア目的をもつほか、患者の精神の健康状態をレクによって確認しアセスメントしようとする目的、患者との関係性を構築しようとする目的に分類できた(表 2)。

また、実際の企画は、看護師が主に企画するものと作業療法士が企画するものを区別して考案されていたり、病院全体で行う企画と場単位で企画されていたり、その企画に患者を含めるかどうかで分類できた(表 3)。

(3) 病棟レクにおける看護師の役割やかかわりについて

看護師の役割については表 4 のように分類できた。

- ①人数の調整、②患者自身の状態から参加の可否についての判断、③一緒に時間を共有し、もり立てる、④患者個々の参加の意味が発揮できるようにコミュニケーションを通じてケアする、⑤スタッフ間の情報交換

と情報共有において調整、伝達する、⑥レク前後の患者の情報や変化についての情報を提供する、⑦行事自体の責任担当、⑧企画への参画：時間調整、準備、患者誘導、実際のイベントの運営、ボランティアの調整、金銭管理、準備状態の確認、反省会の運営など、⑨安全の確認であり、患者の病棟での様子の伝達や、情報交換や調整、レク後の患者の変化を伝えるなど、看

表 1 精神科病院全体のレクリエーションとイベント

レクの種類	イベント名称	内容
季節感を味わえる企画	花見、七夕、夏祭り、クリスマス、盆踊り、節分、ハロウィン、スイカわり、子ども御輿	①芸能鑑賞：コンサート、音楽祭、演芸・お笑いライブ ②作業：習字、音楽、手紙、読書、計算問題、折り紙、ペーパークラフト、年賀状作り
随時実施される企画	① 院内レク、病院レク ② 学生ボランティアによる企画、学生実習による企画 ③ 職員との合同レク ④ ふれあい祭り ⑤ 敬老会 ⑥ 地域との交流：地域連携イベント	③身体を動かす：オリジナル体操、球技大会、ボーリング大会、グランドゴルフ、運動会 ④バザー、フリーマーケット ⑤趣味や嗜好：カラオケ ⑥飲食を伴う：茶話会、食事会、焼き芋 ⑦園芸：園芸、収穫祭 ⑧気分転換：散歩、散策、 ⑨イベント：バス旅行、ドライブ、初詣、お誕生会、温泉周遊、美術館巡り、買い物ツアー

表 2 病棟レクの実践上の目的

レクの目的
(1) 患者の精神の健康状態にかかわるケア目的 患者の主体性／自主性を促す 患者自身のコントロール能力を高める コミュニケーション能力を高める ADL の維持向上 気分転換を促す 離床を促す／活動性を高める／運動量を上げる 集団性を身につける 退院への準備 生活を豊かにする、季節感を高める
(2) 患者との関係の構築 患者との関係性の構築 患者が楽しめる／楽しい時間の共有
(3) 患者の状態アセスメント 患者自身の健康状態を確認する

表 3 病棟レク企画の主体者

担当者
看護師が主に企画するものと作業療法士が企画するもの
病院全体で行う企画と場単位で企画するもの
患者が企画するもの

看護師に特化していると考えられる役割が含まれていた。

#### (4) 企画前後のミーティング

病棟レクは治療的な意味がどの程度含まれるかによって内容や企画に違いがあるかどうかは明確にならなかった。しかしレクの企画前後のミーティングについてみると、保険点数に関連してケア目的を明確に持って行われた場合、実施されている傾向があり、レクの中で観察できた患者の様子を共有し、治療的に患者の病棟生活につなげられるよう、目的の明確な情報交換

の場として用いられていた施設がある一方で、ミーティング自体はあっても簡略化した反省会として行われているものも含まれた。

表 4 看護師の役割

①数の調整
②患者自身の状態から参加の可否についての判断
③一緒に時間を共有し、もり立てる
④患者個々の参加の意味が発揮できるようにコミュニケーションを通じてケアする
⑤スタッフ間の情報交換と情報共有において調整、伝達する
⑥レク前後の患者の情報や変化についての情報を提供する
⑦行事自体の責任担当
⑧企画への参画：時間調整、準備、患者誘導、実際のイベントの運営、ボランティアの調整、金銭管理、準備状態の確認、反省会の運営など
⑨安全の確認

## V. 考察および結論

精神科病院における慢性期にある患者の入院生活の質を高めるための取り組みとして、病棟レクリエーションに着目してその実態を調査した。

調査に先駆けて行った先行文献の検討においても、病棟レクそれ自体の定義づけや医療従事者の認識はさまざまであり、数値データではその認識の違いにより、質問項目への解釈が異なり、調査バイアスが生じることが予測された。本結果ではそのバイアスがみられ、多少のデータの棄却を余儀なくされた。

しかしながら、質的データによる結果では、精神科病院での実態が明らかになり、病棟レクの企画の様態が多種類にわたっていることや、企画に参画する看護師の役割について抽出整理することができた。この中で、ことに看護師の役割は、病棟レクに対する看護師の認識次第で参画の質が高められると考えられ、看護師がレク全体の中での位置づけを明確に認識することによって、患者のレク前後の変化をつぶさに連携スタッフに情報提供することができ、治療的効果を含めてスタッフとともに共有するケアを行う事も可能であると考えられた。また、患者主体の病棟レク企画や患者とともに立てるレク企画に関する記述からは、参画の仕方を工夫することによって慢性期精神疾患患者の入院生活の質を変えることができる可能性もある。

結論として、病棟レクの治療的な意味合いをどのように認識するかということは、重要な論点となると考えられる。患者に提供する病棟レクは、ケアであることを的確に認識することで、目的の明確化と共有、役割分担、患者の変化のアセスメントと評価など、一つのレク企画におけるケアとしての意味を深めていくことで、レクの中身や運営の仕方自体を見直す必要があるだろう。

本研究にご協力いただいた施設の皆様、見学を受け入れていただいた 3 施設に深謝します。

## 文献

- 1) 厚生労働省：平成 23 年度患者調査，2012
- 2) 山口芳史，渡辺雅幸：はじめての精神科作業療法，中外医学社，p153，p140，2011
- 3) 前掲論文 2)
- 4) 高橋ゆかり，田村文子：精神看護学実習における学生主催レクリエーションでの「学び」の分析—企画・運営・評価の過程を通して，パース学園短期大学紀要，6(1)，1-2，2004